

形而上学の時間と哲学の時間 ——『百科全書』の一項目に関する生成論的解釈学——

逸見 龍生

ディドロの思想形成の具体的痕跡を求めて彼が『百科全書』に執筆した項目群に着目しようとするとき、視野に入れるべき最初の地平のひとつは、『百科全書』がどのような過程を経て制作されたのかを分析する『百科全書』本文の成立史である¹⁾。

辞書編纂の実際を示す直接的な史料がほとんど存在しない以上、『百科全書』編纂の現場ともいべきこの問題については、今なおほとんど仮定に頼って議論するほかない。例えば、『百科全書』の項目が、誰の、どのような権限によって、いかに選択されたか。寄稿者たちの間で、項目が実際にどのように割り当てられたのか。項目の執筆にあたって、全体を統括する何らかの編集上の指針のようなものがあったか。個々の執筆者たちは、どのような形で執筆を進め、最終的には、いかなる意図を託して『百科全書』の実現に寄与しようとしたのか——こうした問題についてひとつひとつ答えるには、未だ少なからぬ困難がある²⁾。

これらの問題の解明にあたってのひとつの有望なアプローチが、本文が実際に組み立てられ、書き込まれていったプロセスを研究する本文生成研究である。本研究では、通常であれば草稿を専ら対象とする〈生成〉という概念を、印刷物間の間テクスト的レベルを含んだ、テクストの変容プロセスにまで拡張して用いている³⁾。このような動的アプローチをとることで、近世期における辞書言説という特殊な歴史的言説形式の読解が、研究者に課す課題に答えようとするものである。『百科全書』にとどまらず、17世紀から18世紀に発達した辞書作成では、同時代の様々な文芸共和國的メディアを通じ、過去や同時代の学問的記録——当時の用語で〈証言〉と呼ばれたもの——を抜き出し、必要な変更を加え、自らの本文に書き入れるという、いわゆる文書の引用・編集・集成（compilation）の実践、あるいは本文の再書記行為（réécriture）が一般的であった⁴⁾。だが多様な理由から、引用や再書記行為について沈黙されている場合が少なからずあり、本文批評の未整備は現代の読み手にとっての大きな障壁のひとつとなっている⁵⁾。

本文生成研究は、他の出自をもつテクストがそれと明示されぬまま、本文に複雑に滑り込んでいく部分の抽出を起点とする。だが最大の関心は、テクストの書き直しと改変のプロセスに注目し、項目記事作成において書き手が何を意図したのか、その言説文脈を客観的に再構築することにある。これにより書き手がこれらの典拠をいかにみずからの文章のなかに取り入れ、変容させていったか、自己化＝固有化（appropriation）のプロセスの概念に基づいて検証することが可能となる。

『百科全書』第1巻項目「魂 AME」（形而上学、イヴォン師）への補遺として、すぐ続く箇所にディドロが付した項目「魂補遺 supplément de l'article AME」の生成は、その意味で特に興味深い事

例の一つである。本文テキストの実際の産出の局面から、筆者はこれまで同項目を何度か考察してきたが、そこで明らかとなったのは、実はこの項目の大部分が、同時代の医学・生理学関連の比較的良好に知られた二つの源泉の様々な箇所からの、はめ込み細工のごとく複雑な引用のパッチワークであることであった⁶⁾。いうならばこのテキストは、層となって複数の書き手の文章が暗黙裏に書き込まれている、一種のパリンプセストの様相を呈している。

本稿では、『百科全書』の言語実践のこのようなレベルに着目し、ディドロ自身の文章として特定されたパッセージの機能と主題を検討しつつ、項目「魂補遺」の言説文脈の再構築に取り組みたい。この項目については従来、自己の哲学と同時代の科学の比較（マイエ）、形而上学に対する科学的現実の対比（ロジェ）、魂と身体の合一をめぐる物質的な条件の提示（ウィルソン）、といった解釈がなされてきた⁷⁾。いずれもディドロ最初期の唯物論思想への接近の具体的な証左を見るものである。しかし、この項目に書き込まれた言説の大部分が基本的に他者の言葉の借用であることが明らかになった現在、従来の解釈をそのまま受け取るわけにはいかない。

そこで以下、数々の引用文のはざまに挟み込まれた、ディドロ自身のいわば肉声の介入の部分に注目したい。これまで行った分析によって明らかとしたように、同項目へのディドロの介入は総数で17箇所にあつた。しかし、項目参照指示や分析の対象として取り上げるだけの内容を擁した介入部分は3箇所のみである。その3つのうち、最初と第3の介入が「靈魂の座」に関する本文テキストの導入部および帰結部になっているのに対し、第2の介入は、その長さにおいても、またとりわけ複雑で不透明な内容においても、ひと際顕著な特徴をもつ。しかしながら、この一節の内容についてこれまで十分に注意が向けられてきたとは言いがたい。本稿では、彼自身の項目テキストへの第7番目の介入となる、この一節を分析の対象とする。

I

問題のテキストは次のように始まる。やや長いので、まず前半を引用しよう。

だが、ヴィユサンス氏による原因の仮定が、現前する全事例に一致するとしても、だからといってそれがすなわち実在的原因であるということにはなりえない。古代人は空気の重量の原因に真空恐怖をあてがった。今日、われわれはあらゆる天空の現象を引力に帰している。古代人がもし実験を繰り返し、われわれが万有引力を発見したように、なんらかの恒常的な規則を発見していたとするならば、この法則からもろもろの現象がかけ離れていないかぎり、真空恐怖こそは真に様々な現象の原因であると、考えることは可能であつたろうか。ニュートン主義者は、距離の二乗の反比例の法則を覆して規則的に生じる現象がない限り、引力こそは実在的原因であると想定することは、可能であろうか。まったくそんなことはない（ENC, I. 341b, *DPI*, V, pp.346-347）。

科学の追究する事象に関する非恒常性と相対性、その実在的原因（cause réelle）の究明の不可能性に関するディドロのこの文章は、それ自体取ってみれば、ことさら奇妙な点はないかも知れない。

『自然の解釈に関する断想』でディドロが展開する人間の認識の有限性と、それゆえになされるべき実験の反復の必要性というベーコン的議論の先取をここに見出すことは当然に可能であろう。だがそれにもかかわらず、このテキストには奇妙な不透明さが残る。その不透明さは、第一にディドロの項目の中でこのテキストが挿入されている意味の了解のしがたさに由来している。なぜ靈魂の座を論じているほかならぬこの箇所で、かような問題が提出されているのか。さらに言えばこの問いはなぜ、実在的原因、真空恐怖と引力という三つの概念の組合せとして提示されているのだろうか。

直前の文章はディドロのものではない。王立科学アカデミー論集に書記としてフォントネルが執筆した会員業績の批評的紹介である『科学アカデミー報告』からの直接の引用であることは分かっている⁷⁾。だがそこでフォントネルが彼らしい自由で闊達な筆遣いで述べているのは⁸⁾、メランコリーを発症した患者たちの脳機能を解剖調査した医師ヴィュサンスが、同病の原因を従来の説明図式である患者の発熱に由来するのではなく、血液の高粘度で循環の悪いその成分に由来しているとの仮説を、観察によって確認したことの報告であった。こうした血液成分の変容は環境、食餌、情念の水準でも引き起こされる。フォントネルは、「同様の仮定をさらに望むままに先に押し進めていけば、仮定に対応する結果がえられるだろう」(ENC, I. 341b, *DPIV*, V, pp.346-347) と評価する。なるほどここには、「仮定 supposition」と「結果／作用 effet」との直結的關係が取り上げられており、ディドロの文章がそれに対する注釈の意味をもっているらしいことは分かる。だがそれならばなおさら、このテキストの意味内容ははっきりしない。語彙の上でも、喩えの上でも、前段までの議論の流れと、それがあまりにも異質だからである。

手がかりのひとつは、編集者としてディドロがその補遺を寄稿したイヴォンによる項目「魂」の本文そのものの中に見つかる。ホップズ、スピノザとならべて、魂の物質性をめぐるその所説を要約した上で、イヴォンが護教論的立場からこれに批判を加えているところの、ロックの議論である。ピエール・コストによって18世紀初頭、フランスに広く伝えられた、神学者スティリングフリートとこの哲学者の論争であった。それではそこで何が問題となっているのか。それはディドロの上のテキストとどのように関わるのか。

デカルト主義的護教論者スティリングフリートは、思惟する物質というロックの命題に対し、延長的実体にこのような内在的質 (une propriété intrinsèque) を付与することは背理であることを、非合理的なものへの神の権能の不可能性から立証しようとした。ニュートンの引力の事例は、これに反駁したロックによって導入されている。物質間の引力の本性は、それ自体としては知性で把持することが難しい (inconceivable) ものであり、その原因は人間の知性には不可知 (impénétrable) である。にもかかわらず、天体の運動の現象の説明の水準では合理的に機能している。魂の問題についても同様ではないのか。コスト訳第二版のロックの当該文章を引用する。

物質が近くの物質を誘引しようと考えること、ましてや何里も離れた物質を誘引しようと考えること、かようなことは不可能であるからと言って、神は物質にそのような権能を与えること

はできないと、あなたは言う。物質が感覚を備えて自己運動したり、非物体的な存在に力を及ぼしたり、逆にこの存在に動かされるなどと考えること、かようなことは不可能であるからと言って、神は物質にそのような権能を与えることはできないとも、あなたは言う。それは重力を否定し、惑星の公転を否定することと等しいし、動物を感覚も自発運動も持たない純粋な機械へ変えることと変わらず、人間に感情と意志的運動を拒絶することと同義である⁹⁾。

思惟する物質の本性の知性による把持不能性は、引力という原理と同様に、その本性の作用の不可能性を意味しはしない。ロック自身の議論の枠組みは、神の権能に主知主義的な限定を加えようとするスティリングフリートのソーチーニ派的態度に対する批判としてみられるべきものであり、その限りにおいて理性に対し全能の神への信仰の上位を主張するものであるものの、魂の物質性の証明——というよりも魂の本性の不可知性を証明する議論に、引力の本性の不可知性がロックによって援用され、類比的に重ね合わされたことは、注目してよい¹⁰⁾。

このロックの論理の骨子は、その論争の内容の紹介とともに、ベール『批評事典』第一巻「ディカイアルコス」注釈Mにおいて詳しく引用され¹¹⁾、さらにヴォルテール『哲学書簡』（「書簡13」および「書簡15」）を通じ、18世紀において広く流布した。ベールにおいて、ロックによる引力の喩えは明示的に現れてこないものの、ヴォルテールのテキストは、思惟する物質に関するロックの議論（「書簡13」）と、ニュートンの引力説（「書簡15」）の議論を再び媒介する大きな役割を果たしている。「書簡13」において、スティリングフリートに対するロックの実体本性の不可知性の論理は、「私は物体である。私は思惟する。物質について私が知るところは、それがすべてである」¹²⁾と要約される。「書簡15」においてニュートンの引力説に言わせて次のように言うとき、少なからぬ同時代の反駁者が疑ったように¹³⁾、ロックの議論との接続は明らかである。「引力という語を私は自分が自然のなかに発見したひとつの作用を表すために用いる。それはある未知の原理の確実で疑いのない作用であり、この原理は物質に内在する質であるが、その原因は、私よりも能力の優れた人が、いつか発見することであろう」¹⁴⁾。

実体の実在的本質の不可知論に立って、魂の物質性の仮説をも示唆するこうした論理構造は、ディドロのテキストにおいても「現象 *phénomènes* ないし結果 *effet* 」と「現象ないし結果の原因 *cause* ないし理由 *raison de l'effet* 」の一連の対立、ならびに前者の現前性と後者の理解不能性への対応というかたちで繰り返されている。魂の座、すなわち精神と物体の合一の様態の解明という問題はまさしく、これらと同じ問題圏に属している。たとえ現象の入念な精査から出発するにしても、それが人間にこの原因を産み出す原因に到達させる前提条件とはなりえない。注意すべきなのは、ここでディドロが導入している概念が、マルブランシュの機会因論の意味を強く担った「実在的原因」であることである。「ヴィユサンス氏による原因の仮定が、現前する全事例に一致するとしても、だからといってそれがすなわち実在的原因であるということにはなりえまい」（*ibid.*）。現象とその実在的原因を真に結びつける紐帯（*liaison*）は、ディドロにおいて、そのテキストの末尾に示されているように「ほとんどつねに欠落している。それを見つけることは、われわれには永遠に不可能かもしれない」（*ibid.*）。ディドロの全コーパスの中で、報告者が調査する限り、ほぼ唯一の使用例と思

われるこの「実在的原因」の概念の介在については、それではどのように捉えたらよいのだろうか。

だが差しあたりまずは、こうしたロック以後の議論の系譜のうちに、ディドロのテキストが位置づけられることを確認しておきたい。その限りにおいて、ここでのディドロの介入は、ホッブズ、スピノザ、ロックを自由思想家として捉え、これに対する護教論的批判を展開した、イヴォン神父の項目「魂」の内容への呼応としても読みえる。

だが他方で、上述のロックやヴォルテールには見出し得ない、別の議論の糸口が、ここには絡み合っている。端的にはそれは、先に指摘したように真空恐怖と引力の命題との並置という論理で現れる、異なる水準を志向する議論である。ではそれは何か。

中世アリストテレス主義以来の〈充満〉説とその説明原理としての真空恐怖が、アリストテレス主義のみならず、デカルト自然学において継承され、〈空虚〉の存在をめぐるニュートン物理学の根本的な対立があったこと、それが直接に延長としての物体という概念、ひいては二元論の当否を焦点化するものであったことは、周知の通りである。だが、トリチェリとパスカルの実験を経て、世界の説明モデルとしての両者の軽重はもはや誰の目にも明らかであった。中世的思考の残滓と、同時代の科学の結晶とのこれら二つの解釈図式の価値は、他の啓蒙主義者たち、英仏両文明の比較という枠組みの中で明確に英国文明に軍配を上げたヴォルテール¹⁵⁾、ニュートン物理学の再解釈者であったダランベール¹⁶⁾と同様に、ディドロにとっても同じではない。ディドロによるニュートンへの態度には一筋縄ではいかない微妙な問題が多く含まれているものの¹⁷⁾、少なくとも『自然の解釈について』をはじめとする彼の著作に見られるとおり、理論法則としてのニュートンの万有引力に対し、ディドロが唯物論の形成の上で、その受け入れを拒否した形跡はない¹⁸⁾。

だからこそ一層、ここで問題なのは、真空恐怖の概念と引力の概念とが、交換可能な命題としてディドロによって語られていることの意味である。「古代人は空気の重量を真空恐怖に帰した。今日、われわれはあらゆる天空の現象を引力に帰している」。「古代人」と今日の「われわれ」はともに時制のみ異なる同一の動詞「あてがう attribuer」の主語に等位され、そのことにより真空恐怖説と引力説の同質性が強調されるレトリックがここでは働いている。続く文も同様である。「古代人がもし実験を繰り返し（…）たら、真空恐怖こそは真に様々な現象の原因であると、仮定することは可能であつたらうか。ニュートン主義者は（…）引力こそは実在的原因であると仮定することは、可能であろうか。まったくそんなことはない」。ここでもやはり、二つの主体は、過去形と現在形におかれた同一の動詞「仮定する supposer」のそれぞれの行為者として、時間的な平行関係に置かれ、ディドロは実在的原因たりえない点ではどちらの説も同列であることを、シンメトリカルな統辞構造の次元で強調している。これはヴォルテールとは明らかに逆の立場である¹⁹⁾。

では、どのようにディドロによる介入部分を解釈したらよいだろうか。考察を進める前に、ディドロのもう一つ別のテキストを他の著作から取り上げる。同時期に書かれた『数学論集』（1748）には、ほぼ同じ文言が見つかる。

ある現象の原因が隠されていればいるほど、この原因の発見のためになされる努力は減ずる。だがこの怠惰、あるいは精神のこの失意は、学芸の完成にとって唯一の障害でなければ、最大の障害でもおそくない。無知を告白するよりも、ただの言葉や隠秘性質、何らかの空疎な仮説に執着するほうを好むという空しさが、人にはある。この空しさの方が精神にとってもっと有害なのだ。善かれ悪しかれ、人はあらゆるものを説明したがる。真空恐怖がポンプ内の水を上昇させるとか、渦巻が天体運動の原因であるとか、引力が物体の重力の原因であるとか（中略）とするのは、こうした偏執的狂気のゆえである（*DPIV*, t. II, 265）。

ここでもやはり、真空恐怖の概念と引力の概念が引かれ、さらにデカルト的渦動説が取り上げられた上で、現象と現象の説明原理の不一致が唱えられていることがわかる。自己の無知を表明する代わりに、「言葉」「隠秘性質」「空疎な仮説」に訴えることの愚かさを批判するこのテキストにおいて、前のテキストに比べよりいっそう見えやすいのは、科学的発見における人間の行為の介在の強調であり、同時に情念（怠惰、失意、空しさ）から産み出されるその有限性である。この有限性のなかでディドロが最上位に位置づけるもの、それは人間が盲目的に説明的命題を産出していくその仕方のうちにある。現象と説明不能な実在的原因の中間に、「言葉」「隠秘性質」「空疎な仮説」を性急に打ち立てること。ディドロはそれを「偏執的狂気（*manie*）」と呼んでいる。

確認しておくべきは、これらの説明的命題、解釈格子は特定の孤立的な現象の説明に関する限りでは、不十分ながらあくまでも成立可能であるということである。ポンプ内の水の上昇、天体運動、そして物体の重力は、いずれもこれらの解釈格子によって、一定程度合理的には説明ができる。問題は、これら解釈格子が真の原因の究明に達することは可能かどうかにある。ディドロはこれを言下に否定する。最初のテキストに戻ろう。「古代人がもし実験を繰り返し、われわれが万有引力を発見したように、なんらかの恒常的な規則を発見したならば、この法則からもろもろの現象がかけ離れていないかぎり、真空恐怖こそは様々な現象の実在的原因であると、考えることは可能であろうか。ニュートン主義者は、距離の二乗の反比例の法則を覆して規則的に生じる現象がない限り、引力こそは実在的原因であると想定することは、可能であろうか。まったくそんなことはない」。

「今日、われわれ [が] あらゆる天空の現象を (…) 帰している」引力説もまた、原因として措定することの不可能な「偏執的狂気」のうちに数えられていることに注意しよう。真空恐怖、渦動説と同一軸に置かれることにより、引力説もここでは明らかに相対化の運動の中に巻き込まれている。アリストテレス、デカルト、ニュートンという三つの認識論が同一の時間的継起のうちに編入されることで、すべての解釈格子の相対性と有限性が強調されるという構造がここにはある。その点において、ロックやヴォルテールの議論には回収しきれない、時間の変容と生成という問題を含む異質な論理構造をディドロのテキストはもっている。そこで焦点化されるのは、動的で可変的な体系の生成と消滅のプロセスである。ではそれはいかなる地平にあるのか。だがこの問題を考察するには、同時代の一人の護教論者の議論を参照することが必要である。ここにはディドロの議論との類比が見られ、ディドロの議論の意味を再確定するのに必須と思われるからである。

II

その議論は、1747年にチューリッヒで出版されたジェルディル（Giacinto Sigismondo Gerdil, 1718–1802）『ロックを非として証明された魂の非物質性』²⁰⁾にある。時代を代表する数学者、物理学者である著者のジェルディルは、マルブランシュ派の護教論者でもあった²¹⁾。その著作『魂の非物質性』は、ロック反駁書として最も成功した著作のひとつであり、同時代の『ジュルナル・デ・サヴァン』誌記者が「デカルトの形而上学的体系がこれほど見事に、これほど首尾よく擁護されたことはない」と高く評した問題作であった²²⁾。

同書第6部は「スティリングフリート氏を非とする、魂の物質性に関するロック氏の疑いの根拠事由の検討」と題され、ロックとスティリングフリエットの論争がそこでコスト訳から採録されている。二元論に立つ護教論者ジェルディルの議論の眼目は、ロックが「説明不能でかつ把持不可能な引力」なる科学的知見を自説の支えにし展開した、実体の実在的本質の不可知論を、背理に追い込むことであった。そのためには、引力説の不可知性そのものに照準を合わせ、これを相対化せねばならない。こうした意図のもと、ジェルディルは、マルブランシュ哲学に従い、単純にして豊饒な道によって世界を統べる神の知恵たる一般法則の漸次的な発見のプロセスとして科学の発展を捉え、その認識論を歴史化していく。真空恐怖説と引力説が、以下の文章のように、同じ歴史的展開の内に並置され直されるのは、このような文脈においてである。

物体の硬性、その弾性、重力、磁力、電気力は今日私たちに諸々の結果を示しているが、トリチェリやパスカル以前には真空管のある高さで液体が静止する真の原因（*vraie cause*）が知られていなかったのと同様に、私たちもその真実の原因を知らない。今日私たちは、かつて無知と自惚れからいまや非難の対象となっているあれら哲学者たちがしたことと、正確に同じことをしているのである。私たちは万有引力というものを想像し、これは物質に内在する質（*une qualité intrinsèque de la matière*）であると想定している。だが、この質なるものは、真空恐怖が自然からかけ離れているのと同じほど、私たちの観念からかけ離れている。実際引力説を潤色するため、真空恐怖説に欠けていた代数計算が引力説には付加されたが、この計算は、結果に関連するほどには、結果の原因と主張されるものには、あまり関わらない代物だった。結局のところ、この計算にも関わらず、かつてひとが真空恐怖説に対して態度を改めたように、引力説についても態度変更が必要となった。このことは、引力説が真空恐怖説以上に実在的であるわけではないことを、証し立てるものである。この説がいま主張されているのはただ、空気圧により液体を様々な高さまで上昇させるこれらすべての結果を、自然がいかなる原理によってかくも単純に産み出しているのかを、私たちが知らないからである。つまりこういうことである。何か新しい発見がなされるにつれて、物質の内に無益に添加されてきたあれらの質の一部は消失していく。それにつれ、物質の観念の内に内包された質、すなわち重さ、形姿、そして運動のみへと近づいていく²³⁾。

ニュートンの引力説は、天体の運動の現象を、一見合理的に説明しているようにみえる。しかし

実際には、それは単に一過性の理論である。より人間の認識が進めば、ニュートンの原理に替え、いっそう単純な方法で事象を説明可能とする、新たな原理が見出されるであろう。真空恐怖の原理がまさしくそうであったのと同様に。同様に、思考する物質という、理性に反し、矛盾に充ちた説も、またいつかは覆され、魂と身体との合一が、最も単純な物質の観念のみに基づいた、いまだ見つかからない新たな説明原理によって、解明される日が来る。こうして、認識の進展と現象因の説明の変転は、真の原因たる一般法則に導かれた、単純な方法への漸次的な接近のプロセスとして捉えかえされ、神の恩寵の秩序の永遠のシステムを証明する、信仰の道と一致するものとみなされているのである。

このような認識論的な議論の構成において、原因の審級を神と人間の次元に二重化する機会因論の区別と、またその根柢を貫くマルブランシュ的な「神にすべてを見る」という観念が、ジェルディルの思惟の方法を、深く規定していることは論を俟たない。ここにあるのは、進歩の概念をめぐるマルブランシュ主義的な信仰と理性との調停の原理、叡智の時間の霊性の賛美と、世俗的時間における科学の探求との一致の原理なのである。

では、ディドロにおいて、この時間はどのように位置づけられているのであろうか。

ディドロの『数学論集』の刊行がジェルディルの著作刊行の一年後であったこと、イヴォンとディドロによるこの項目「魂」もまた、ほぼ同じ47年末から48年にかけての時期に執筆されたらしいことから、ディドロがジェルディルの行論を知りえていた可能性は必ずしも低くはない²⁴⁾。ただ、外的証拠がなく、ディドロがジェルディルの所論を知っていたかどうかは、推測の域を出ない。

だがいずれにしても、ジェルディルの議論を経由し、ディドロのテキストに戻ってくるとき、この護教論者に対するディドロの力点の置き方の差異が、いまや明瞭にみえてくる。ジェルディルと同じように、ディドロにとってもまた、現象を説明するための人間の様々な説明原理は、やはり有限的で、時間の上で生成し、消滅する一時的、一過的なものとして構想されている。それら原理を超えたジェルディルが「真の原因」と呼ぶものが、ディドロにおける「実在的原因」に対応しているのも見えやすい。こうした概念構造の中で、真空恐怖説と引力説という二つのエピステモロジカルなシステムは歴史の中で並列化される。

しかし、ジェルディルにあってディドロにないもの、それは神の永遠で不変の秩序への、知を通じた限りない前進と接近の運動という、形而上学的時間の表象である。

ヴィユサンス氏の仮説についても同様である。脳漿に小さな管があり、片方が開くと片方が閉まる、といったところで空しい。メランコリー的錯乱の増減がこれら小さな管の開閉に依存すると、かりに彼がそれを目で見て確かめるならば（そんなことは不可能であろうが）、彼の仮説には確実性は増すであろうし、それは確かに、汐の干潮を引き起こす月の運動に相関した、引力の作用と同じレベルの確実性には達することであろう。だがそれでも、この仮説がまだ証明されるには至らないのである。これらのことはすべて、われわれが理解するのはただ、結果間の照応のレベルだけあって、結果に照応する原因のほうは、これいっさいが理解の埒外にあ

ることに由来しているのである。ほとんどつねに、連関そのものはわれわれには欠落している。それを見つけることは、まず不可能であろう（ENC, I. 341b, *DPI*, V, pp.347）。

ディドロに読み取れるものは、現象の理解にあって、人間の認識が絶対的確實性へと至ることの不可能さである²⁵⁾。真空恐怖説であろうと、引力説であろうと、「実在的原因」に到達不能であるという点において、それはどちらの説も変わりはない。その限りディドロも、「引力説が、真空恐怖説以上に実在的であるのではない」というジェルディルの言葉には、進んで同意を示すであろう。彼らはいずれも、世界説明のための現在のシステムは、暫定的で不完全であるとみなす。だがジェルディルにあって、時間の進展の内に合目的化された、神の永遠の秩序への接近運動として表象される、叡智的時間の靈性は、少なくともディドロにあっては存在しない。「新しい発見がなされるにつれて、物質の内に無益に添加されてきた、あれらの質の一部は消失していく。それにつれ、物質の觀念の内に内包された質、すなわち重さ、形姿、そして運動のみへと近づいていく」とジェルディルが述べた終結点 *terminus ad quem* は、ディドロの時間のなかには存在しえない。

そもそも、この絶対的次元にある原因のレベルには、人間自身が近づいているかどうか、自ら判断する当否すら不確実である。悟性の暗闇を踏み越え、それを判断しようと主体に言わせるものも、彼の情念にほかならないからである。フォントネルによって想定された、現象と原因の間の直接的な結合の論理に、ディドロの批判が向けられるのは、この結合の論理が、端的に理神論による神の存在証明における、論理的短絡を演繹するからである。フォントネルがヴィユサンスの観察に触れ、科学における因果性の直結を論じたとき、ディドロがそれをあまりにも不用意なものと思したのは、こうした因果性をめぐる形而上学的観点に立ってに違いない²⁶⁾。ディドロが言うのは、人間たちは、世界の現象の説明図式のうち、どれが原因に近いのかどうか、自らには決して把持できない、盲目的な状況の中にある、ということである。「これらのことはすべて、われわれが理解するのはただ、結果間の照応のレベルだけあって、結果に照応する理由のほうは、これいっさいが理解の埒外にあることに由来している」（*op.cit.*）。

ところで、あらためてジェルディルとの比較において見るとき、ディドロにおける時間は、目的論を欠いた反目的論的時間、定められた方向を持たぬ、無方向ないし多方向的時間としての性格を呈しているように思われる。それは究極の静止点を持たない動的な運動であり、絶えず後続する者たちにより、その体系と図式が覆されていく不安定な運動である。こうした中で人間に可能なのは、推理あるいは感覚を通じて現象間の照応をより精緻に理解し、自らの仮説の確實性を増していくのみである。

こうした論理——同時期に執筆された『盲人書簡』にも内包されたルクレティウスの生成論理²⁷⁾と呼ぶこともできよう——の形象化は、ほかならぬこの補遺項目でディドロが集めた、「靈魂の座」論に表出されていないか。頁のさらに先、やはりディドロ自身が介入しているくだりでは、こう書かれている。「デカルトは自分のために推測のみしかもたず、現象の一致以外の根拠を持たなかった。ヴィユサンスは解剖学的観察に基づいて体系をつくった。ラ・ペロニ氏は実験をして自らの体系を産んだ」（ENC, I. 341b-342a, *DPI*, V, pp.348）。ここでディドロが読み取ろうとしているのは、推測か

ら観察、さらに実験へと進む科学認識の発達、ないし方法論的洗練の歴史であろうか。確かにそうした側面もあるかもしれない。だが実験によって辿り着いた地点は通過点に過ぎず、続いてディドロが風刺的な筆致で、やはり自ら次のように書くように、さらに「新たな実験」は積み重ねられ、結論は「別の場所へ移動」していく。「こうして魂は脳梁に住まうこととなった。また新たな実験が生じ、別な場所に移動されるまで」(ENC, I. 342b, *DPV*, V, pp.350)。

先に記したように、ジェルディルの書物をディドロが読んでいたかどうかは明確でない。したがって、同時代のマルブランシュ派の護教論的議論の読書の痕跡が、上のディドロの一節に見られるかどうかは、なお今後の検証を要する。だが両者の議論にある種の交叉を認める視点が許されるとすれば、科学体系の交替と変転を合目的時間の中に展開し、神の道へと向けて整序化した、マルブランシュ主義護教論者の議論は、ディドロが、彼自身の思想を、学説の交替と変容という水準において、いかに形成していったか考える手がかりを示す、いわばプリズムの役割を果たすように思われる。その後のディドロの思想の歩みにおいて、「実在的原因」という用語は消失する。その代わりにディドロの思想の前景を占めていくのは「自然」ないし「全体」という概念である。その変容のプロセスに注目することはここでの主題を超える。

しかし、認識が、上に記述したような合目的性を欠いた時間の中で営まれるのであれば、認識の営みの意義は何によって担保されるのだろうか。この問いに答えることは、ディドロの百科全書哲学の根本的な意味を考察する上で不可欠である。しかしそのためには、『百科全書』を含めたディドロのコーパスの新たな検討が必要となる。ここでは少なくとも二つの帰結を考えることができる。

新たな事実の観察と実験に即して、仮説自体は次々と移り変わる。産み出される体系はそれゆえ不動性をもちえず、そのドグマとしての本性は、絶えず批判者によって再審されることとなるであろう。ここには学芸の価値の判定者としての「後世」および「公衆」の概念が要請されるひとつの伏流がある。他方でまた、静止点が存在せず、つねに動的に新たな体系を産み出し続ける学芸の時間は、「解釈」という概念の再定義を必要とする。このようなディドロの発想は、彼の記した項目「百科全書」においてさらに強調され、百科全書的秩序の動的な生成構造として表象されていくように思われる²⁸⁾。「百科全書は哲学の世紀に生まれる」という、同項目でのディドロの言明において、体系や時間は〈一〉へと帰着するものとは考えられず、〈多〉と〈複数〉に向けて開かれたものとして、思考の内に形象されるのである。

以上、本稿では、生成研究によりテクスチュアルなレベルでの選別と差異化が可能となった、ディドロの介入部分の機能と主題に着目し、その解釈を試みてきた。ここで明らかになったのは、英国から大陸（オランダ、フランス、イタリア、そしてドイツやスイス³⁰⁾）へと空間を移しながら、汎ヨーロッパ的規模で問われた、魂と身体との合一という形而上学的問題への、ディドロによる独自なひとつの呼応、ないしはひそやかな対話のありようである。なるほどこの項目には、後にディドロにおいて露呈していく唯物論的なものへの関心の方向は、全体にすでに十分に示されているものの、同じ『百科全書』第1巻項目「動物 Animal」に素描されたような、創発的生命論の主題

系列は姿を現していない。この項目でのディドロの関心はむしろ別な方向に向かっていると考えるべきであろう。〈靈魂の座〉をめぐる諸家の議論の矛盾、〈魂の病〉から発する諸々の人体の不調状態に関する引用の枚挙を通じ、キリスト教教義の基盤である魂の靈性への懷疑を読者へと告げる、靈肉二元論批判という本項目の基調となる主題系列に縫合された形で、科学認識論の時間的生成、仮説の産出と変容、因果性の形而上学をめぐるディドロの思考が錯綜し、網状に絡み合っているのである。

ディドロ思想の形成において、本稿で分析した時間論の主題がもつ射程を最後に強調しておきたい。学芸のシステムの不安定性と交替、因果性の形而上学における人間認識の有限性から生まれる体系の〈一〉性への警戒という主題は、何よりもまず、『百科全書』「技芸の詳述」においてディドロが展開した、技術の哲学と歴史をめぐる一連の思想的形象とともに、あらためて考察されねばならないだろう。本項目で記述された、学知の生成をめぐる盲目的な時間的営為の表象は、織工や細工師、工芸品や紡織や農業・冶金・工業機械にあてられた項目でディドロが提示する職人技術に固有の時間性と、ディドロの意識においては内奥の並行関係にあると予想しうるからである。この観点からはさらに、これら一連の議論を主導してきたベーコン思想——しかしそのディドロへの通路は、従来認識されてきたそれよりも、より厳密に歴史的に再解釈されるべきである³¹⁾——との相似と差異にもあらためて光があてられねばなるまい。こうした問題意識はまた、ディドロの自然哲学における時間の機能の問題一般へと解釈のパースペクティブを拡げさせることになるだろう。このようにより長期的観点に立って見るとき、本項目「靈魂補遺」は、ディドロの思考の基層の歴史的断面をよく照射するテキストのひとつとして、より明瞭にその解釈論的地平が了解されうるのである。

『百科全書』を読む営為は新たにまた始まったばかりである。そこには多くの思想間の通路がいまだ眠っており、その解明を通じてディドロら百科全書派の思想に新たな光を与えることができる。生成論的観点も、そのひとつのアプローチと考える。言語のミクロなレベルにおける差異への注意により、『百科全書』の哲学の特異性が、鮮やかな相貌をもって立ち現れてくる可能性を信じたい。

* 本稿の原型は日仏哲学会 2012 年秋秋季研究大会・特別シンポジウム「ディドロ哲学再考：生誕 300 年を迎えて」（2012 年 9 月 8 日、東京大学文学部）における日本語による口頭発表「『百科全書』の哲学・言語・政治」である。その後同発表に修正を加え、国際シンポジウム「日仏啓蒙・『百科全書』研究集会」（2012 年 9 月 29 日、慶應義塾大学）においてフランス語で発表し、以下に掲載した。「*Le temps métaphysique et le temps philosophique — à propos du supplément éditorial de l'article AME », Recueil d'études sur l'Encyclopédie et les Lumières*, no 2, mars 2012, pp.41-56. 論文の内容を日本語で二度（日本フランス語フランス文学会東北支部大会・特別シンポジウム「ルソー、ディドロ生誕 300 年にあたって」2012 年 11 月 3 日（土）、岩手大学・岩手県立大学、中央大学人文科学研究所公開研究会「『百科全書』の生成論的解釈学の試み」2013 年 1 月 16 日、中央大学）、そしてフランス語で一度（*Chantiers des Lumières, L'Encyclopédie à l'âge de la numérisation*, 28-29 mars 2013, Université Paris Denis Diderot）紹介する機会があった。この日本語版の作成にあたっては、参加者から寄せられた質疑での貴重な示唆を参考にし、フランス語版にさらに加筆修正を施した。

註

- 1) 以下、『百科全書』およびディドロの引用は以下の版をそれぞれ用い、略字・巻数・頁数とともに本文中に示す。*Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres* [以下、*Enc*と略], Paris, Briasson, David, Le Breton, Durand, 1751-1765, 17 vol. in-fol ; Denis Diderot, *Œuvres complètes* [以下、*DPV*と略], éditées par Herbert Diekmann, Jacques Proust, Jean Varloot & al., Hermann, 1975 et suiv. 34 vol.『百科全書』について本稿では同書の慶応義塾大学メディアセンター所蔵パリ・オリジナル版を利用した。なお、同版の真正性については、Richard N. Schwab, with the collaboration of Walter E. Rex, *Inventory of Diderot's Encyclopédie*, 6 vols, « Studies on Voltaire and the eighteenth century (80, 83, 85, 91-93) », Oxford, The Voltaire Foundation, 1971-72. を基に調査した、以下の論文を参照。逸見龍生『「百科全書」を読む——本文研究の概観と展望』『欧米の言語・文化・社会』（新潟大学人文学部「ヨーロッパの基層文化と近代」プロジェクト）第11号、2005年、pp. 39-92。
- 2) この問題について最も重要な寄与は、1960年代にジャック・ブルースト、ジョン・ラフによって先鞭をつけられた。特に以下の二著を参照。Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, Paris, Albin Michel, 1996 ; John Lough, *The Encyclopédie in Eighteenth-Century England and other studies*, Newcastle upon Tyne, Oriel Press, 1971. その後ここ20年近くに『百科全書』本文批評研究の状況は活発化した。特に以下の二著を参照されたい。Marie Leca-Tsiomis, *Écrire l'Encyclopédie. Diderot : de l'usage des dictionnaires à la grammaire philosophique*, vol. 375, « Studies on Voltaire and the Eighteenth Century », Oxford, Voltaire Foundation, 1999 ; Alain Cernuschi, *Penser la musique dans l'Encyclopédie*, Honoré Champion, 2000. この状況はすでに逸見龍生『「百科全書」を読む——本文研究の概観と展望』、前掲で取り上げた。
- 3) 『百科全書』研究における生成論研究としては、先に挙げたLeca-Tsiomis, Cernuschi の著作のほか、Sylviane Albertan-Coppola, « Réécriture dans l'Encyclopédie à partir de quelques exemples », dans Chantal Foucier, Daniel Mortier, eds., *L'Autre et le même. Pratiques de réécritures*, Rouen, P. U. de Rouen, 2001, pp. 37-49. をも参照されたい。『百科全書』ではないが、ディドロによるテキストの推敲過程の検討から、この作家の書き方の特性を考察した日本における先駆的な研究としては、佐々木健一「書き手としてのディドロ：『絵画論』研究のために」『美学藝術学研究』、2001年、pp. 1 - 40がある（佐々木健一『ディドロ『絵画論』の研究』、第二巻、中央公論美術出版、2012年、pp. 711-736に再録）。
- 4) 「証言」（témoignage）は古典主義期の古事学的人文主義——それは聖書学、文献学や歴史学、詩学や修辭学などのみならず、過去の文書の保管と伝承、批判という歴史記述法を通じ、医学や博物誌、薬学分野などひろく自然科学の領域へも拡がりをもつ——における「権威 auctoritas」の主題系に直結する歴史的概念である。アウグスティヌス主義からパスカル、そして歴史ピュロニスムにいたるこの概念の信仰論的系譜については、塩川徹也「権威と認識——「権威」の概念について」『パスカル考』岩波書店、2003年、pp.85-100を参照。だが本稿との関わりでは、「証言」と「権威」はとりわけ『百科全書』を始めとする近世期同時代の辞書製作における重要な鍵概念である。
- 5) Leca-Tsiomis, *op.cit.*, および Richard R. Yeo, *Encyclopaedic visions : scientific dictionaries and enlightenment culture*, Cambridge ; New York, Cambridge University Press, 2001.
- 6) 逸見龍生『「百科全書」第一巻ディドロ寄稿項目における「王立科学アカデミー概要および論文集」典

- 抛』、『人文科学研究』（新潟大学人文学部紀要）、1996年12月、pp.49-70、逸見龍生「デイドロ執筆項目『『靈魂』補遺』——『百科全書』本文校訂の試み』『藝文研究』（慶応義塾大学文学部紀要）第91号、2006年、pp.45-66、および Tatsuo HEMMI, « Les Références implicites dans le supplément éditorial de l'article AME de Diderot », *Recueil d'études sur l'Encyclopédie et les Lumières*, n° 1, mars 2012, pp.41-61.
- 7) 註6を参照。
- 8) 『王立科学アカデミー報告』は、王権による検閲を免除されており、その発表はフロントネルにとっしてしばしば自由思想の実験的表現の機能を担っていた。Voir Maria Susana Seguin, « La Question de l'âme humaine dans les écrits de l'Académie des Sciences durant la première moitié du XVIII^e siècle », *La Lettre Clandestine*, n° 18, 2010, pp. 161-180.
- 9) John Locke, *Essai philosophique concernant l'entendement humain traduit par Coste* ; édité par Émilienne Naert, « Bibliothèque des textes philosophiques. », Paris, J. Vrin, 1983, pp.441-442, note 1. この論争がコスト訳に組み入れられたのは、第二版である。なお、コスト訳のフランスにおける受容と、コストによる翻訳過程でもたらされたロックの議論の唯物論的側面の強調については、次の論文を参照。Ann Thomson, « Locke, Stillingfleet et Coste. La philosophie en extraits », *Cromohs*, 12, 2007, pp. 1-16.
- 10) ロックの認識理論については、François Duchesneau, *L'Empirisme de Locke*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1973.
- 11) Pierre Bayle, *Dictionnaire historique et critique*, 2^{ème} éd. revue corrigée et augmentée par l'auteur. éd., Rotterdam, R. Leers, 1702, p. 1047, note M. Voir Ann Thomson, *Bodies of Thought. Science, Religion, and the Soul in the Early Enlightenment*, Oxford, Oxford University Press, 2008, pp. 141. et suiv.
- 12) Voltaire, *Lettres philosophiques*, édition critique par Olivier Ferret et Antony McKenna, « Bibliothèque du XVIII^e siècle », Paris, Classiques Garnier, 2010, p.111.
- 13) John W. Yolton, *Locke and French Materialism*, Oxford, Clarendon, 1991, p.39.
- 14) Voltaire, op.cit., p.125. « je ne me sers du mot d'attraction que pour exprimer un effet que j'ai découvert dans la nature, effet certain et indiscutable d'un principe inconnu, qualité inhérente dans la matière, dont de plus habiles que moi trouveront, s'ils peuvent, la cause».
- 15) Ira Owen Wade, *The Intellectual development of Voltaire*, Princeton, New Jersey : Princeton University Press, 1969, p. 237. ヴォルテールの以下の『哲学書簡』の言明も、そのような構図の中で読まれるべきである。Voltaire, *Lettres philosophiques*, *Ibidem*. « Qu'il me soit permis de faire encore parler un moment Newton. Ne sera-t-il pas bien reçu à dire : « Je suis dans un cas bien différent des Anciens. Ils voyaient, par exemple, l'eau monter dans les pompes, et ils disaient : « L'eau monte parce qu'elle a horreur du vide. Mais moi je suis dans le cas de celui qui aurait remarqué le premier que l'eau monte dans les pompes, et qui laisserait à d'autres le soin d'expliquer la cause de cet effet [...] La cause du ressort de l'air est inconnue, mais celui qui a découvert ce ressort a rendu un grand service à la physique ».
- 16) Michel Paty, « D'Alembert et la théorie physique », dans Monique Emery, Pierre Monzani, éd., *Jean d'Alembert, savant et philosophe : portrait à plusieurs voix*, Paris, Éditions des Archives contemporaines, 1989, pp. 233-260 ; Véronique Le Ru, *Jean Le Rond d'Alembert philosophe*, Paris, Vrin, 1994.

- 17) 『盲人書簡』のソルダーソンの臨終場面におけるニュートンとクラークへの言及はその一例である。
DPV, IV, pp.49-50.
- 18) Paolo Casini, « Newton, Diderot, et la vulgate de l'atomisme », *Dix-huitième siècle*, n° 24, 1992, pp. 29-37.
- 19) Jean Ehrard, *L'Idee de nature en France dans la première moitié du XVIII^e siècle*, 1963, S.E.V.P.E.N, rééd. Paris, Albin Michel, 1994, p. 133.
- 20) Giacinto Sigismondo Gerdil, *L'Immatérialité de l'âme démontrée contre M. Locke, par les mêmes Principes, par lesquels ce Philosophe démontre l'Existence & l'Immatérialité de Dieu, avec des nouvelles preuves de l'immatérialité de Dieu et de l'âme, Tirées de l'Écriture, des Peres & de la raison, par le P. Gredil Barnabite, Professeur de Philosophie au Collège Royal de Casal, ouvrage dédié à S. A. R. Monseigneur Le Duc de Savoye*, Turin, 1747.
- 21) Yoltonは1750年前後に、マルブランシュ派によるロック批判が急増したことを指摘し、その筆頭に Gerdil を挙げている。John W. Yolton, *op.cit.*, pp.60-85、特に pp.60-62 ; Ferdinand Alquie, *Le Cartésianisme de Malebranche*, Paris, Vrin, 1974, p.15. パスカルの真空論との関係では、Arnoux Straudo, *La Fortune de Pascal en France au Dix-huitième siècle*, « Studies on Voltaire and the Eighteenth Century : 351 », Oxford, Voltaire Foundation, 1997, p.161. 18世紀におけるマルブランシュ派と百科全書派との闘争の中で Gerdil の果たした役割については、Didier Masseau, *Les Ennemis des philosophes. L'Antiphilosophie au temps des Lumières*, Paris, Albin Michel, 2000, pp.231 et suiv., 特に p.234.
- 22) *Journal des savants*, Paris, Imprimerie royale, décembre, 1752, p.801.
- 23) Gerdil, *op.cit.*, p.167.
- 24) チェンバーズを典拠とせず、まったく別の資料群を利用していること、項目全体の基本構成も、『サイクロपीディア』ではなく、むしろ『トレヴー辞典』の項目「魂AME」を下敷きにしているように思われること等からみて、本稿の執筆は、ディドロがダランベールとともに編集主幹の席につき、チェンバーズ『サイクロピーディア』の翻訳企画という当初の編集方針を大幅に変化させた47年末以後でないと考えられる。
- 25) こうした見方はディドロだけでなく、他の百科全書派にとっても共有されていたように思われる。たとえば、原因と結果間の〈比例性〉批判はダランベール力学における主要論点の一つであった。Véronique Le Ru, *op.cit.*, およびそれと関連する Véronique Le Ru, « La Réception occasionaliste de Descartes : des malebranchistes à l'Encyclopédie », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n° 38, 2005, pp. 191-202.
- 26) フォントネルにおける因果性の概念については、そのマルブランシュとの論争を分析した興味深い論考が以下に見られる。Bernard Baertschi, *Les Rapports de l'âme et du corps. Descartes, Diderot et Maine de Biran*, Paris, Vrin, 1992, pp. 256 et suiv.
- 27) DPV, IV, 52. « Qu'est-ce que ce monde, M. Holmes? un composé sujet à des révolutions qui toutes indiquent une tendance continuelle à la destruction; une succession rapide d'êtres qui s'entre-suivent, se poussent et disparaissent; une symétrie passagère ; un ordre momentané ».
- 28) Georges Benrekassa, « Penser l'encyclopédique : l'article «Encyclopédie» de l'Encyclopédie », dans *Le Langage des Lumières. Concepts et savoir de la langue*, Paris, PUF, 1995, pp. 232-262. ベンレカッサは、本項目中に見

られるディドロの時間概念が、単線的な進歩史観には還元しえない複雑な構造を有している点を指摘し、そこに見られる新たな百科全書的知の生成の条件となる断絶と変容、反転と急転に満ちた特異な時間表象は、神的秩序であれ世俗的秩序であれ、知を統御する永遠の静的な秩序という従来の時間表象に相反し、対峙するものであると分析している。

- 29) Cf. Arthur W. Wilson, *Diderot. Sa vie et son œuvre*, traduit de l'anglais par Gilles Chahine, Annette Lorenceau, Anne Villeaur, « Bouquins », Paris, Laffont/Ramsay, 1985, pp. 126-127 et Jacques Roger, *Les Sciences de la vie dans la pensée française du XVIII^e siècle : La génération des animaux de Descartes à l'Encyclopédie*, « L'Evolution de l'humanité », Paris, Albin Michel, 1993 [1963], p.601 ; Michèle Crampe-Casnabet, « Les Articles ÂME dans l'Encyclopédie », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n° 25, 1998, pp. 91-99.
- 30) Fernando Vidal の近年の研究により、『百科全書』における魂と身体の一の主題が、イヴェルドン版『百科全書』のより保守的なそれと比較され、より明瞭な形で提示されることになった。Voir *Les Sciences de l'âme, XVI^e - XVIII^e siècle*, Honoré Champion, 2006, pp. 346 et suiv.
- 31) ベーコン思想のディドロへの影響については、特に次の諸研究が優れている。Herbert Dieckmann, « The Influence of Francis Bacon on Diderot's « Interprétation de la nature » », dans *Studien zur europäischen Aufklärung*, München, Wilhelm Fink Verlag, 1974, pp. 34-57; Roselyne Rey, « Dynamique des formes et interprétation de la nature », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n° 11, 1991, pp. 49-62 ; François Pépin, *La Philosophie expérimentale de Diderot et la chimie*, « Histoire et philosophie des sciences », Paris, Classiques Garnier, 2012.

Le temps métaphysique et le temps philosophique

— essai de l'herméneutique génétique du Supplément éditorial de l'article AME

Tatsuo HENMI

Nous envisageons comment les relations entre savoir et temps s'expriment chez Diderot et ce qui les distingue d'autres discours philosophiques contemporains de l'encyclopédiste. Nous essayons d'étudier ces questions en nous attachant plus particulièrement à la genèse de l'article « Supplément à l'AME » de Diderot dans l'*Encyclopédie*, ce qui nous amènera à pratiquer une sorte d'herméneutique génétique. Ainsi considérons-nous comment l'argumentation diderotienne se situe par rapport aux philosophies classiques, et comment Diderot développe dans l'*Encyclopédie* sa propre conception de la temporalité en suivant des modèles radicalement différents de ceux des auteurs classiques.